

Mon. Nov 23, 2020

Track2

会長賞講演多領域専門職部門

会長賞講演多領域専門職部門 (II-TRPAL)

座長: 藏ヶ崎 恵美 (福岡市立こども病院看護部 PICU)

座長: 赤松 伸朗 (大阪市立総合医療センター)

10:15 AM - 10:55 AM Track2

[II-TRPAL-1] 先天性心疾患児の小学校生活に関するインタ
ビュー調査－母親と教師の視点の相違に着目
して－

○川崎 友絵, 萩本 明子 (同志社女子大学 看護学
部)

[II-TRPAL-2] 子どもの医療に携わる看護師長と副看護師長
が直面する倫理的問題とその対処

○辻尾 有利子¹, 井林 寿恵² (1.京都府立医科大学
附属病院 PICU, 2.京都府立医科大学 小児医療セン
ター)

[II-TRPAL-3] 離床開始後に遅発性心タンポナーデを発症し
た開心術の2症例

○金田 直樹, 名和 智裕, 夷岡 徳彦 (北海道立子
ども総合医療・療育センター)

[II-TRPAL-4] 小児心臓カテーテル検査・治療における
NIRSを用いた下肢血流評価の有用性

○青田 恭朋¹, 佐藤 有美², 上村 和也², 白井 丈晶³
(1.加古川中央市民病院 臨床工学室, 2.加古川中
央市民病院 小児科, 3.加古川中央市民病院 循環器
内科)

会長賞講演多領域専門職部門

会長賞講演多領域専門職部門 (II-TRPAL)

座長: 藏ヶ崎 恵美 (福岡市立こども病院看護部 PICU)

座長: 赤松 伸朗 (大阪市立総合医療センター)

Mon. Nov 23, 2020 10:15 AM - 10:55 AM Track2

- [II-TRPAL-1] 先天性心疾患児の小学校生活に関するインタビュー調査－母親と教師の視点の相違に着目して－
○川崎 友絵, 萩本 明子 (同志社女子大学 看護学部)
- [II-TRPAL-2] 子どもの医療に携わる看護師長と副看護師長が直面する倫理的問題とその対処
○辻尾 有利子¹, 井林 寿恵² (1.京都府立医科大学附属病院 PICU, 2.京都府立医科大学 小児医療センター)
- [II-TRPAL-3] 離床開始後に遅発性心タンポナーデを発症した開心術の2症例
○金田 直樹, 名和 智裕, 夷岡 徳彦 (北海道立子ども総合医療・療育センター)
- [II-TRPAL-4] 小児心臓カテーテル検査・治療における NIRSを用いた下肢血流評価の有用性
○青田 恭朋¹, 佐藤 有美², 上村 和也², 白井 文晶³ (1.加古川中央市民病院 臨床工学室, 2.加古川中央市民病院 小児科, 3.加古川中央市民病院 循環器内科)

(Mon. Nov 23, 2020 10:15 AM - 10:55 AM Track2)

[II-TRPAL-1] 先天性心疾患児の小学校生活に関するインタビュー調査－母親と教師の視点の相違に着目して－

○川崎 友絵, 萩本 明子 (同志社女子大学 看護学部)

Keywords: 先天性心疾患, 小学校生活, 母親と教師

【目的】

先天性心疾患児の小学校生活には保護者と教師の協力が不可欠であるが、立場や認識の違いから相互理解が難しく齟齬が生じることがある。そこで、先天性心疾患児の小学校生活の現状を母親と教師双方の視点から検討した。

【方法】

研究協力者は、先天性心疾患児を持つ母親10名と患児が通う小学校の教師6名（担任教師と養護教諭、各3名）。母親と教師各々に小学校生活の現状に関して、2017年12月～2018年7月に半構成的面接を行った。面接内容を録音、逐語的に記述し意味のある文節をコード化、意味内容の類似性にてカテゴリー化し、抽出されたカテゴリーに基づき概念の関係性を表した。本研究は同志社女子大学の倫理審査委員会の承認を得た（承認番号：2016-31）。

【結果】

母親の年齢は30～60代、子どもの年齢は8～29歳、疾患はファロー四徴症、両大血管右室起始等、学校は普通学級6名、支援学級3名、特別支援学校1名であった。教師の年齢は20～50代、教師歴は7年～33年、担当は普通学級2名、支援学級1名であった。母親から抽出されたコアカテゴリーは< I心臓病とともに生活しているわが子>< II学校生活を送る上で母親が感じる問題点>< III学校生活への要望と母親の思い>< IV成長とともに変化する問題と将来への不安>の4個、教師からは< i学校生活の中での心臓病の児童の姿>< ii学校生活を送る上で生じる問題点>< iii学校生活の中での指導と配慮>< iv保護者との関係性>< v医療との連携の現状>の5個であった。

【考察】

小学校生活に関して母親は、< I>子どもの生活全般や< IV>変化する問題と将来の不安等、幅広く長期的な視点で学校生活を捉え、教師は< i>学校の中での姿や< iii>学校での指導と配慮等、学校生活の枠組みの中での視点で捉えており相違が認められた。しかし、主治医と学校の連携強化やさらなる医療の介入への要望は共通点と考えられた。

(Mon. Nov 23, 2020 10:15 AM - 10:55 AM Track2)

[II-TRPAL-2] 子どもの医療に携わる看護師長と副看護師長が直面する倫理的問題とその対処

○辻尾 有利子¹, 井林 寿恵² (1.京都府立医科大学附属病院 PICU, 2.京都府立医科大学 小児医療センター)

Keywords: 倫理的問題, 看護管理者, 小児

【目的】子どもの医療に携わる看護師長（以下、師長）と副看護師長（以下、副師長）が直面する倫理的問題と対処を明らかにし、倫理的問題解決への示唆を得る。【方法】小児系病棟に勤務する師長と副師長を対象とし、子どもの医療で直面した倫理的問題と対処について半構成的面接を行い、内容分析した。倫理審査委員会承認後に実施した。【結果】対象者は、師長4名（平均師長経験5.5年）、副師長7名（平均副師長経験5.0年）であった。倫理的問題は【子どもの擁護者としての意識が低い看護師の存在】【倫理的思考と看護実践の乖離】【子ども中心の病床管理が実現しない状況】【小児医療に見合わない人員配置】【終末期医療における関係者の価値の相違】【他者に委ねられた子どもの最善】【制約の多い子どもの療養環境】【根拠が示されない鎮静

や抑制】【親に依存した在宅療養の現実】等の13カテゴリーで、サブカテゴリーに、先天性心疾患の＜安静を目的とした鎮静薬の常用化＞＜根治術が危ぶまれる子どもの親の葛藤＞が含まれた。対処は【倫理的行動のロールモデルとしての自覚】【倫理的問題を話し合える組織風土の形成】【子どもが安全に過ごすための環境調整】【子どもを取り巻く人々との協働】【子どもの最善の利益に基づいた代理意思決定支援】【子どもの権利擁護を基軸とした看護実践の推進】の6カテゴリーであった。【考察/結論】師長と副師長は、子どもの権利擁護が不十分な看護師の姿勢、看護ケア、療養環境、意思決定を問題と捉え、先天性心疾患では鎮静管理や親の葛藤を問題と捉えていた。また、役割モデルとして、環境調整、多職種協働、代理意思決定、看護実践を牽引していた。看護管理者は、組織や他部門との交渉、適切なリソースの活用を促進し、子どもと家族の権利擁護に向けた療養環境や意思決定を支えると同時に、看護師に対する教育的・実践的関わりを通じて、倫理的な組織風土を醸成する必要がある。

(Mon. Nov 23, 2020 10:15 AM - 10:55 AM Track2)

[II-TRPAL-3] 離床開始後に遅発性心タンポナーデを発症した開心術の2症例

○金田 直樹, 名和 智裕, 夷岡 徳彦 (北海道立子ども総合医療・療育センター)

Keywords: 開心術, 早期リハビリテーション, 遅発性心タンポナーデ

【背景】先天性心疾患に対し開心術を施行し、多職種による術後早期離床・リハビリテーション(以下早期リハ)開始数日後に、遅発性心タンポナーデを発症した2例を経験したので報告する。

【目的】発症群と非発症群の術前/術中/術後因子を検討し、リスク管理の一助とする。

【対象】2018年5月～2019年12月、早期リハ介入を行った179例、内10歳以上で手術アプローチが胸骨正中切開であった11例、発症群2例(14±4歳)、非発症群9例(17±6歳)を対象とした。

【方法】1)患者背景2)術式、手術時間、人工心肺時間、術中輸血3)閉胸後ドレーン留置期間、術後抗凝固療法、術後自力体交/座位/立位に要した日数、介入初回血液検査データを収集、後方視的に比較した。

【結果】2例は閉胸後4日と6日に発症、両者胸骨からの出血だった。1例は閉胸後1日にヘパリン、1例は3日にアスピリンにて抗凝固療法を開始していた。以下発症群/非発症群順に、1)BMI20.5±2/16.8±2。2)大動脈弁置換術1例/1例、右室流出路再建術1例/4例、VSD・ASD閉鎖術0例/4例。手術時間406±36分/285±107分、人工心肺時間177±33分/112±62分。術中輸血1例/2例で無輸血1例/7例。3)ドレーン留置期間2±1.4日/1.3±0.6日、抗凝固療法2例/4例(ヘパリン1例/1例、アスピリン1例/3例、ワーファリン1例/1例)。自力体交2±1病日/1病日、座位2.5±0.7病日/1.2±0.4病日、立位6±5病日/2.4±1.0病日であった。血液検査データは、PLT($10^3/\mu\text{L}$)85.5±19/138±36、Fg(mg/dL)283.5±44/256±33、APTT(sec)42.9±11.8/30.3±2.5であった。

【考察】閉胸後の自力体交日数等は概ね差は無く、離床速度の影響は不明だった。しかし、発症群は両者抗凝固療法を施行、介入初回の血液検査データでPLT低値とAPTT延長の傾向を認め、非発症群に比較し易出血傾向であった。BMIも大きく起居動作時の胸郭捻転など胸骨に対する物理的影響が強かった可能性がある。以上を胸骨正中切開後の症例に早期リハ介入を行う上でのリスク因子として、留意が必要と思われた。

(Mon. Nov 23, 2020 10:15 AM - 10:55 AM Track2)

[II-TRPAL-4] 小児心臓カテーテル検査・治療における NIRSを用いた下肢血流評価の有用性

○青田 恭朋¹, 佐藤 有美², 上村 和也², 白井 丈晶³ (1.加古川中央市民病院 臨床工学室, 2.加古川中央市民病院 小児科, 3.加古川中央市民病院 循環器内科)

Keywords: NIRS, 大腿動脈血栓閉塞, 小児

【背景】小児心臓カテーテル検査・治療(小児カテ)の合併症の一つに急性大腿動脈閉塞(AFAO)があり、その発生頻度は1~9%と報告されている。カテ中の下肢血流評価には皮膚色調、温度差、SpO₂波形等があるが、定量的・連続的な評価は困難である。近赤外線分光法(NIRS)を用いた局所組織酸素飽和度(rSO₂)は、非拍動流下でも局所酸素需給バランス変化、灌流状態の評価が可能である。近年、成人でのNIRSによる下肢血流評価の有用性は報告されているが、小児での報告はほとんどない。

【目的】小児カテにおけるNIRSによる下肢血流評価の有用性を検討すること。

【対象】2017年11月~2019年2月に先天性心疾患、川崎病後冠動脈瘤に対する小児カテ時にNIRSを用いて下肢血流評価をした12例。年齢は中央値0.9(範囲0.3-7.9)歳、体重6.9(4.4-24.8)kg、体表面積0.33(0.25-0.92)m²。

【方法】Medtronic社製 INVOS 5100Cを両側腓腹部に装着し、シース挿入側のrSO₂最低値[rSO₂(min)]、対側との最大差[rSO₂(diff max)]を測定し、年齢、体重、体表面積、シース留置時間、大腿動脈径(FAd)、シース外径(Sd)とFAdとの比(Sd/FAd)との関連を検討した。対側との差[rSO₂(diff)]の変化を入室時、シース挿入時、挿入5・10・30分後、シース抜去前、退室時で評価した。

【結果】rSO₂(min)は体表面積(r_s=0.86, P<0.001)と相関を認めた。rSO₂(diff)はシース挿入5分後(P=0.0018)、10分後(P=0.0015)、30分後(P=0.0453)で有意な低下を認めた。12例中1例でAFAOを合併した。非AFAO例ではカテ中のrSO₂(min)が44(16-73)%、rSO₂(diff max)が27(6-52)%に対し、AFAO例ではrSO₂(min)が15%、rSO₂(diff max)が72%と著しく低下し、シース抜去後も改善しなかった。

【結論】NIRSによりカテ中の下肢血流を非侵襲的に連続かつ定量的に検出できた。AFAOの早期発見に重要なモニタリングになり得る可能性が示唆された。rSO₂の評価方法については今後の検討が必要であると考えられる。